

説教要旨「ふさわしくない者をも」

ルカによる福音書7章1～10節

ここに登場する百人隊長は、ユダヤ教において自分が異邦人であり、神様の
み前に出てその救いにあずかるのにふさわしくない者だということを深く自覚
していました。異邦人である自分と神様の民とを隔てる一線を深く意識しつつ、
それでも彼はイエス様に、自分の僕を病から救って下さるように願いました。
異邦人である自分は、イエス様のみ前に出ることすらもふさわしくない、とい
う思いと、それでも僕を助けたいという葛藤の中で、彼は友人たちを通してイ
エス様に、「ひと言おっしゃってください。そしてわたしの僕をいやしてくだ
さい」と願ったのです。イエス様に来ていただくことも、自分が出かけていく
ことも、どちらも自分にはその資格がない。しかし、ひと言お言葉をいただく
だけならと、神さまの憐れみを求めたのです。

百人隊長は、自らがイエス様に救いを求めるにふさわしくない者だ、という
ことを深く知っていました。対して、彼の使いとして来たユダヤ人の長老たち
は呑気なことを言っています。自分たちに親切にし、多額の献金をささげて会
堂を建ててくれた、そうした彼の良い行いゆえに、本来異邦人とはつき合うだ
けで汚れると言って毛嫌いし、交わりを持とうとしない彼らが、平気でその使
いとしてやってきて、「あの人はふさわしい人です」と言っているのです。

ここに出てくるユダヤ人の長老たちは、自分たちがふさわしくないとは全く
思っていない。むしろ自分たちが救いにあずかるのは当然だと思っているの
です。そう思っているから、百人隊長のことをイエス様に「この人はふさわし
いですよ」などと推薦しているのです。自分は神様のみ前に出てその救いにあ
ずかることができる、と思っている人は、あの人もこの人もふさわしいんじや
ない？だってあの人いい人だし…と考えるのです。そこには本当の信仰はあり
ません。自分も他人も、それぞれのふさわしさによって救いにあずかれるよう
に何となく思ってしまうのです。しかし神さまの憐れみは、自分が本来救いにふ
さわしい者ではない、という自覚のもとにこそ注がれるのです。